

足尾鉍毒事件とは・そして田中正造は

足尾という地名は、今でこそ「産業遺産と環境のまち」として観光ガイドブックに紹介されています。

足尾は、江戸時代から昭和にかけて約 400 年にわたり「銅山のまち」として栄えてきました。

慶長 15 年（1860）年、銅山が発見されて以来、幕府の管轄下におかれ、おおくの労働者が採掘と精錬を行いました。江戸中期には足尾千軒と呼ばれるほどの繁栄でした。

その後しばらく衰退しますが明治 10（1877）年に古河市兵衛が経営に着手すると、先進的な技術と設備の導入により生産を急速に伸ばしました。明治二十（1887）年代には日本全体の産出の 40%を占める日本一の銅山となり、近代化の産業の礎の一つとなりました。

時は流れ、産業化の時代とともに、韓国を日本の植民地とした 1910 年の「韓併合」の時、国策として、すでに足尾銅山から排出された重金属や酸性排水が、渡良瀬川中・下流の農地を汚染し農作物の生育障害や人命損傷をもたらしていたのでした。

1905 年の日露戦争の時も田中正造は鉍毒被害とたたかい、徴兵と重税にくっつきしむ「貧民」のために日清日露戦争遂行には反対しました。日露戦争の時には、反対の姿勢はより鮮明で「日露問題よりも鉍毒問題の解決が先決である」という意見でした。田中正造は人民の立場で一貫した行動をとりました。

「世界各国皆海陸軍全廃」（軍備全廃）を主張し、そのために生涯をささげました。